

## メトロポリタン史学会 第十三回総会・大会のお知らせ

下記の要領でメトロポリタン史学会の第13回総会・大会を開催します。大会シンポジウムでは「現実社会と歴史学・考古学—発信力を取り戻せるか?」と題して、歴史学と現在の社会との関係を問います。

ご存知の通り、従軍慰安婦問題に関する歴史学の研究成果はその分野を超えて共有されているとは言い難く、社会における歴史への関心さえも低下しているように見えます。また、大学内においては、学部・学科の再編や若手研究者問題によって、歴史学は以前に増して困難な状態にあります。こうした現在における歴史学の位置を考え、各国間で状況を比較し、将来における歴史学の在り方を模索したいというのが企画の趣旨です。

当日は、日本近現代史研究の立場から源川真希氏、フランス現代史研究の立場から中野隆生氏、考古学研究の立場から小野昭氏の報告に引き続き、矢野久氏（ドイツ現代史）からコメントを頂戴し討論に移ります。皆様の多数の参加をお待ち申し上げます。

(メトロポリタン史学会委員会)

- 日時 2017年4月22日(土) 午前10時30分～午後6時  
会場 首都大学東京 本部棟1階・大会議室  
(京王相模原線南大沢駅下車 徒歩約10分)  
日程 ①総会：午前10時30分～12時  
②大会：午後1時～6時

### シンポジウム「現実社会と歴史学・考古学—発信力を取り戻せるか?」

研究報告

[報告者]

源川真希氏 (首都大学東京)

「現代史のなかの日本近現代史研究の位置を考える

——歴史学は、世のため人のための役に立っているのだろうか?——」

中野隆生氏 (学習院大学)

「現代都市史研究とフランス社会 (仮)」

小野昭氏 (首都大学東京名誉教授)

「現実社会と考古学——切り結ぶ局面の特質——」

全体討論：午後4時～6時

コメント 矢野久氏 (慶應義塾大学名誉教授)

懇親会：午後6時30分～8時30分

# メトロポリタン史学会第4回若手研究者の集い報告

2016年11月19日(土)、首都大学東京5号館1階142号室において第3回若手研究者の集いが開催されました。参加者は14名でした。

研究報告と書評との題目は以下のとおりです。

土居嗣和氏(早稲田大学高等学院地歴科 非常勤講師)

「律令制大臣の地位的特質—儀礼と待遇を中心に—」

大沼巧氏(東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程)

「大韓帝国期(1897~1910)における海税徴収の実態と所有権の整理—慶尚南道沿海部を中心に—」

福士由紀氏(首都大学東京 都市教養学部)

「書評 帆刈浩之著『越境する身体の世界史—華僑ネットワークにおける慈善と医療—』  
風響社、2015年」

林田伸一氏(成城大学 文芸学部)

「書評 佐々木真著『ルイ14世期の戦争と芸術—生みだされる王権のイメージ—』  
作品社、2016年」

研究報告ではフロアから専門的な質問が投げかけられてより議論が深まり、書評では対象書籍の著者も交え、熱気を帯びた議論が展開されました。研究報告及び林田氏の書評については要旨が、福士氏の書評については当日の報告を活字化した内容が、それぞれ先日刊行された『メトロポリタン史学』第12号に掲載されておりますので、是非ご吟味下さい。



〔当日の様子〕

2016年10月8日(土)、第9回歴史探訪「市川市の史跡を巡る」を開催しました。参加者は7名でした。当日はあいにくの雨模様で始まりましたが、多くの史跡・博物館施設をまわり、充実した見学会となりました。卒業生の栗原大司氏より参加記をご寄稿頂きました。忙しい中、ご執筆下さった栗原氏に御礼申し上げます。

## 第9回歴史探訪参加記 市川市の史跡を巡る

栗原大司(史学科2003年卒)

今回の歴史探訪では、一か所にとどまらずに市川市内にあるいくつかの史跡と博物館めぐりました。当日は朝から大雨だったものの、少人数ながらなんとか開催できました。

### ○手児奈霊堂と井戸(真間の井)

市川市の真間には手児奈伝説があります。この辺りにはかつて非常に美しい少女がいましたが、彼女をめぐって争いが起きたため、悲嘆にくれた手児奈は、身を投げたといわれています。

市川市はかつて海の底だったため、井戸を掘っても海水が出てきてしまい飲用には適しませんが、真間の





井だけ真水が出ます。それはここが丘のふもとにあるため、雨水が地下を通って湧き出ているからだそうです。

また、この井戸へ行く道に生えているアシは、手児奈がケガしないように片側にしか葉が生えなかったといわれています。現在でも水は湧き出しています。

手児奈霊堂のそばには、万葉集でも歌われている真間の継橋がありました。そばには真間の継橋にちなんだ歌碑があります。ただし、橋の下にはすでに川はなく、水は流れていませんでした。

### ○郭沫若記念館

郭沫若は一時期市川市に居住していたことにちなみ、当時の邸宅を移築復元したものです。手入れがあまりされていなかったため、大部分は傷んでしまい、移築時点で復元したのですが、ガラス戸など一部の建材は当時の物を使用しているそうです。春は芝桜がきれいだそうです。訪れたときはこれといって花は咲いておりませんでした。

突然の訪問にもかかわらず、すでに80歳を過ぎているボランティアガイドの方が熱心に説明してくださり、中には奥村先生も知らないような話もありました。郭沫若との2番目の妻をとみとは、5人の子供をなしたものの中国帰還後は別居生活を続け、その後亡くなるまで3回しか会わなかったという話は驚きました。また記念館の中には、周恩来との手紙や著作、写真などが展示されていました。

郭沫若は日本の学者とも交友があったため、日本の学者と一緒に写っている写真がいくつかありました。その中の一枚に山田先生の恩師に当たる杉原先生が写っていたため、それを見た山田先生は昔の思い出話を披露してくださいました。

### ○下総国分寺

奈良時代に聖武天皇の詔により全国に建てられた国分寺の一つです。建物自体は何度か消失していますが、所在は変わっていないためかつての遺構がいくつか残っています。山門にある阿吽の仁王像のうち、吽形は明治時代の火災で焼失してしまったため、設置されているものは復元したのですが、阿形は焼失を免れたため、おおきな傷が残っているものの修復して現存しています。

近くに国分尼寺跡もありますが、こちらは時間の都合上訪れることができませんでした。

### ○市立市川考古博物館

バスに乗り北国分駅のそばまで行くと市川市立の歴史博物館と考古学博物館があります。どちらも入館無料とのことでしたが、考古博物館に行きました。考古博物館は古代あたりまで、歴史博物館は中世以降というような区分けをしているようです。

突然の来訪にもかかわらず、学芸員の領塚さんが、閉館時間いっぱいまで熱心に説明してくださいました。入館してすぐのホールに展示されているコククジラの化石は博物館の名物だそうで、来訪者の多くが印象に



残って帰るそうです。コククジラの化石は現在では背骨が失われていますが、他の骨と一緒に背骨も発掘されたのですが、保管がずさんで神社の軒下に放置されていたため、近隣の住民が持ち帰ってしまったそうです。いまでは植木鉢の台にしている人もいます。



また、考古学博物館のそばには工事中の外環道があり、工事現場で発見された遺跡の報告展示が考古学博物館では定期的に行われています。訪れた日は開催日ではありませんでしたが、発掘の様などを紹介した広報誌が配布されていました。

### ○堀之内貝塚

考古学博物館の隣には堀之内貝塚があります。ここでは4000年前の貝が地表に露出しており、その上を歩くことができました。普段から見学コースとして開放されているため、コース上の貝殻は多くの人によって踏まれて砕けていました。ただし、コースを外れたと



ころにある貝殻は原形をとどめており、4000年前の貝とは

にわかに信じられませんでした。また、雨上がりのため蚊が大量に発生しており、貝塚の見学中にあちらこちらを刺されてしまいました。

貝塚の見学中に閉館時間となったため、歴史博物館へ行くことはできませんでした。

今回は短い時間の中で、とても多くの史跡をめぐることができました。時間の都合上訪れることができなかった史跡もありますので、機会がありましたら是非訪れたいと思います。また、一か所にとどまらなかったため、郭沫若記念館、考古学博物館、堀之内貝塚以外は特別な説明がなかったのですが、それでも山田先生などの説明により、いろいろなことを知ることができました。千葉方面の史学探訪は今まであまり行われなかったとのことですが、これを機にこの地域でも行われるようになったらいいと思います。



## 【投稿のお願い】

本会では、会員の皆様の積極的なご寄稿をお待ちしています。広く、歴史研究・教育の諸領域にかかわる内容のものを求めます。

## 『メトロポリタン史学』(The Metropolitan Shigaku) 投稿規定

- (1) 本誌は、年一回12月に発行するものとし、原稿の締切は、毎年8月末日とする。
- (2) 投稿資格は、原則として会員に限る。ただし、編集委員会からの依頼原稿に関してはこの限りではない。
- (3) 投稿言語は、日本語または英語とする。
- (4) 投稿原稿は、歴史学・考古学、歴史教育の分野に関する以下の種目のものとする。
  - ①論文（図表を含み、24,000字以内；英文の場合は、8,000語以内）
  - ②研究ノート・史料紹介（同 12,000字以内；英文の場合は4,000語以内）
  - ③学界動向（8,000字以内；英文の場合は2,700語以内）
  - ④時評・提言（4,000字以内）
  - ⑤書評（4,000～8,000字）
- (5) 論文、研究ノート（縦書き、横書きいずれも可）には、欧文で要旨（300語以内）を添付する（原文が英文の場合は日本語要旨800字以内）。また目次用の英文タイトルを付記する。
- (6) 原稿は、編集委員会が採否を決定する。その際、論文、研究ノートについては、編集委員会および編集委員会が委嘱した査読者の審査を経る。
- (7) 著者校正は、初校のみとし、校正時における文章の大幅な変更は認めない。
- (8) 注は、末尾にまとめる。
- (9) 原稿は原則として、印字された原稿（表、図表を含む）3部、USBメモリなどの記憶媒体及び別記送り状\*（1部）を提出する。
- (10) 掲載の論文、研究ノート・史料紹介、学界動向については、別刷り50部を進呈する。
- (11) 原稿の送り先、照会については、

〒192-0397 八王子市南大沢1-1 首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系  
国際文化コース（歴史・考古学分野）、河原 研究室気付  
『メトロポリタン史学』編集委員会  
Tel: 0426-77-2119（河原研究室） Fax: 0426-77-2112  
E-mail: kawara28@tmu.ac.jp（河原温研究室内） SNC47077@nifty.com（河原温）

\* 送り状は学会ホームページ（<http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>）からダウンロードしたものをコピーするか、事務局にお問い合わせください。

### 【事務局からのお願い】

●メトロポリタン史学会会報第21号をお届けします。第13回総会・大会のご案内を申し上げます。奮ってご参加ください。引き続き会財政健全化のため、年会費を年度内にお支払い下さいますようお願いいたします。一般5,000円、学生・院生3,000円です。

メトロポリタン史学会（会長 木村誠）

〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1

首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 国際文化コース 歴史・考古学分野内

TEL: 0426-77-2110（赤羽目匡由研究室） E-mail: mshigaku@tmu.ac.jp

ホームページ: <http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>

郵便振替: 00100-0-537287 メトロポリタン史学会